

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【11】台地の直線道路…境川から八橋へ■

1 直線を追う

古代の幹線道路は、山地では屈曲することがありますが、平地では強い直線指向がありました。そう考えると、前回到達した豊明市の上高根から先は境川の平坦地で、さらにその向こうは比較的平坦な碧海の台地に続きます。従って次の課題は、その中に直線の道を探していくこととなります。

目標地点は、古代の紀行文に登場する「八橋」でしょう。10世紀、在原業平が登場する『伊勢物語』の東下り旧跡です(図1)。八つの橋の架かった川のほとりで句の頭を杜若(かきつばた)にかけて詠った歌、

から衣 きつつなれにし つましあれば



図1 東海道名所図会にえがかれた八橋とかきつばた

はるばるきぬる たびをしぞ思う

は業平の歌とされ、古代から有名な場所だったと考えられます。そして八橋は11世紀の『更級日記』にはすでに廃れていたと記述されています。今回は、上高根からこの八橋に向かう直線の道を追って碧海の台地へと歩を進めたいと思います。

2 八橋への道

(1)三河の古代東海道

境川は尾張国と三河国を分ける川です。上流の猿投断層の下から、下流の衣浦湾へと、大河ではありませんが古代から重要な川に位置づけられてきました。越えると三河です。

三河国の古代東海道は『延喜式』によると3つの駅家があり、『和名抄』からその存在した郡が次のように想定できます(図2)。

鳥捕駅：碧海郡

山綱駅：額田郡

渡津駅：宝飯郡

これらのうち北にあるのは鳥捕駅で、その候補地は、矢作川の左岸の宇頭付近と考えられています。従って、古代道路は両村駅からほぼ南東に進んだことになり、おおよそ後の中世東海道である鎌倉街道のルートにあたるようです。また碧海郡の知立郷に



図2 三河国の古代東海道(文献②)

は、東境、西境、井ヶ谷、中田などが存在していたとされることから、境川から八橋に向かう古代道路が通ると考えられる区域はほぼ知立郷に含まれると考えることができます。

(2)八橋というところ

在原業平の詠んだ八橋や杜若のことは、すでに宮廷歌人に知られていたようです。そして蜘蛛手に別れて流れる川に架かった8つの橋と杜若の群落は伊勢物語の題材になりました。8つの橋の由来は定かではありませんが、江戸時代の書には、9世紀の中頃、二人の子供を川で亡くした母親が幾つにも分れて流れる川に8つの橋を架けたとされます。

この付近には平安時代の末に重原荘という荘園ができました。そして八橋付近はその拠点として、古代から中世へと移っていくなかで、街道の「宿」(野路宿と)の働きを担うようになっていきました。

(3)直線をさがす

では、具体的に古代道路の可能性のあるルートはあるのでしょうか。地図で目標地点の八橋付近を探してみると、杜若で有名な無量寿寺の西に鎌倉街道跡とされる道があります。ほぼまっすぐに、少し北の駒場から八橋を通って南へ、断続的ではありますが次の駅家になる鳥捕駅の候補地の宇頭方面へと続いています。この道は直線性から見ても古代道路として有力な候補といえそうです。

一方手前側の上高根からは、前回紹介した梶山氏が推定した条里制の、ほぼ南北に伸び



図3 上高根から駒場の想定ルート。Aが境川、Bが駒場。市境のところに600m程の直線がある

る線があります。明治の地図では、この線が境川とぶつかる所に川を渡る細い道もあるのです。以上のように両端を押えることが出来ると、問題は中間部の、北側の境川の渡りから南側の駒場・八橋を通る直線の道まで、どこを辿ったかということになります。

この間の鎌倉街道跡とされる道は、北側が沓掛の字・宿になるため、ルートの北半分は少し西にカーブします。しかし、南半分はほぼ直線になっており、その中間の豊田市と刈谷市の境界に沿う区間などに直線部が読み取れます。そして偶然でしょうか、その直線部を北に延長すると先ほどの境川の渡りになり、南に延長すると八橋の手前の駒場になるのです(図3)。

今回の区間には、残念ながら古代道路跡の決定的なものはありません。しかし古道の跡が行政区の境になっている例は多く、また中世の鎌倉街道に引き継がれていることから、この直線は古代道路を疑いうるルートといってもよいのではないのでしょうか。

3

紀行 碧海の台地へ

… 境川から八橋へ …

両村駅と想定した上高根から、境川を越え

て南に、八橋を目指して歩くことにします。距離は、これまでよりは少し長くて12⁺程度になります。

〈境川を渡る〉

名鉄本線の前後駅から赤池(日進市)行のバスに乗って、上高根で降車します。道は新道のため、上高根の集落は少し北の丘の上です。道をバックして信号交差点を左に曲り、新しくできた広い道を南に進みます。周辺は農地改良で大きく姿が変えられていますが、古代は条里制の区画があり、その方向は現状とは違い、他の多くの条里区画のように南北だったようです。少し行くと横断歩道があります。この辺りを南北に通過していたというのが、今回の古代道路の推定です。振り返ると北に上高根付近の丘が見えます。ここから西に集落の中に入ってみましょう。2本目を左に、旧道に入ります。この道は下高根、小所と通って境川橋へと続きます。広い通りを越え少し行くと右に八幡社があります。この辺りが中世の鎌倉街道が通っていたとされる所で、中に入ると左手に十三塚の碑等があります。

旧道を進み、広い通りに出る100⁺程手前の道を左に入ります。この道が旧道で、境川に突き当たり右に行くとも境川橋です。川はさほど大きくありませんが、この川が尾張と三河の境でした。上流を見ると猿投山がよく見えます。右が急になっているのが断層の跡で

振り返って見た上高根付近。中央へこんだ辺りに行者堂がある



境川の流れ。遠くに猿投山が見える

しょうか。

〈八橋を目指して〉

さて、ここからが古代道路の探索です。川を渡りその堤防の上を上流に進みます。少し行くと右下に神社が見えます。酒井神社といい、この北側を鎌倉街道が通っていたとされます。古代道に想定した渡りはさらに上流ですが、道が取れないのでここで堤防を下り、神社の北の道を進みます。一帯は田園地帯です。広い通りに出て信号を越え、少し先の右斜めの道に入り、すぐの道を右に進みます。左手にこんもりとした緑の一角が見えます。祖母神社で、そこに向かうために次の水路橋のある道を左に曲ります。神社は古代末にできたとされますが、神社の中に鎌倉街道跡とされる古道跡があります。ところがその方向はほぼ南北です。この位置では、鎌倉街道は門前付近を西北から東南に進んだはずで、古代道の想定ルートは、社の東側を北北西から南南東に通るはずですが少し気になります。

神社の裏手を南に、すぐ突き当たって左に曲ると、小さな川に祖母橋が架かっています。川の手前を右に、川に沿って広い通りを越えて上流に進みます。途中、地蔵群の立つ塚が街道跡を感じさせてくれます。川の突き当たりは、岩ヶ池で、右手には巨大な伊勢湾岸道路が見えます。



祖母神社内にある鎌倉街道跡とされる道。少し方向がちがっている？

池の堤の下を通り、右に迂回して高速道路の下を抜けます。南に進み、少し複雑な交差点を越えて東に行くとも新池です。右に曲って堤を通り、左側の2本目の旧道で左に曲ります。道はやや上りになり、緩やかに右にカーブして突き当たります。正面にお堂があり、如意輪観音がまつられています。この辺りが、古代の道路と鎌倉街道との分岐点ではなかったでしょうか。5差路のような交差点を南に進みます。まっすぐに続く道は亀ヶ根池の堤を通り、少し行った所で突き当たり、左に鍵

の手に曲ってまた南東に進みます。

少し行くと通りの向こうに「鎌倉街道伝承地」と書かれた石柱が建っており、工場の敷地内のような小道を進みます。この付近からの直線が今回古代道路の基準線とした道で、今は豊田市と刈谷市の境になっています。境の道は5、600^歩、ほぼまっすぐに続き、境を外れると右にカーブして下りになります。下った所で広い通りを越えると女川です。その新田橋を渡り少し上ると駒場小学校があります。入口には鎌倉街道伝承地を説明する掲示板があります。そしてすぐ国道155号を渡り駒場の集落に入ります。古代は境川からここまで直線の道だったのでしょうか。

駒場は馬を育てたところのようで、江戸時代の知立の馬市と関係するようです。ここで道は少し左に曲って再びまっすぐな道になります。八幡社と徳念寺のある集落を過ぎ、道が下りになると前に高架道路(衣浦豊田道路)が現れます。高架を潜った先に今度は「古東



駒場の街道の曲り角(北向き)



高架道路の下をまっすぐに八橋に向う。男川はこの付近を蜘蛛手に分れて流れていた

海道」の説明版があります。平坦な地形は男川の河川敷です。まさに八橋の川が蜘蛛手に分かれて流れていた所でしょう。

今回はここまで。男川に沿って上流に行くところ10分程で名鉄の三河八橋駅があります。

工場入口に建つ「鎌倉街道伝承地」の碑。古代道路もここを想定した



市境の直線道路



女川。八橋付近の男川と下流で合流し、逢妻川になる



4 断続する直線の道

古代道路が中世の道に引き継がれていくことは自然です。今回の区間は、多くは鎌倉街道ルートと重なりました。とくに後半の碧海台地には、一度折れますが、明確な直線の道を見つけることができました。前半の境川前後の低地部に古代道路や鎌倉街道が残っていないのは、江戸時代以後の水田や溜池の開発のためにルートが変更されていったからでしょう。面白いのは、後半の直線部が断続していることです。それは、元々直線だった道が後世に部分的に変えられた結果と読めるからです。従って単なる直線道路よりも確度が高いと考えることもできるのです。さて、この連載の最後の地点、八橋はもうすぐそこになりました。

〈主な参考文献〉

① 編纂委員会『知立市史』(1976、知立市)

② 古代交通研究会編『日本古代道路辞典』

(2004、八木書店)